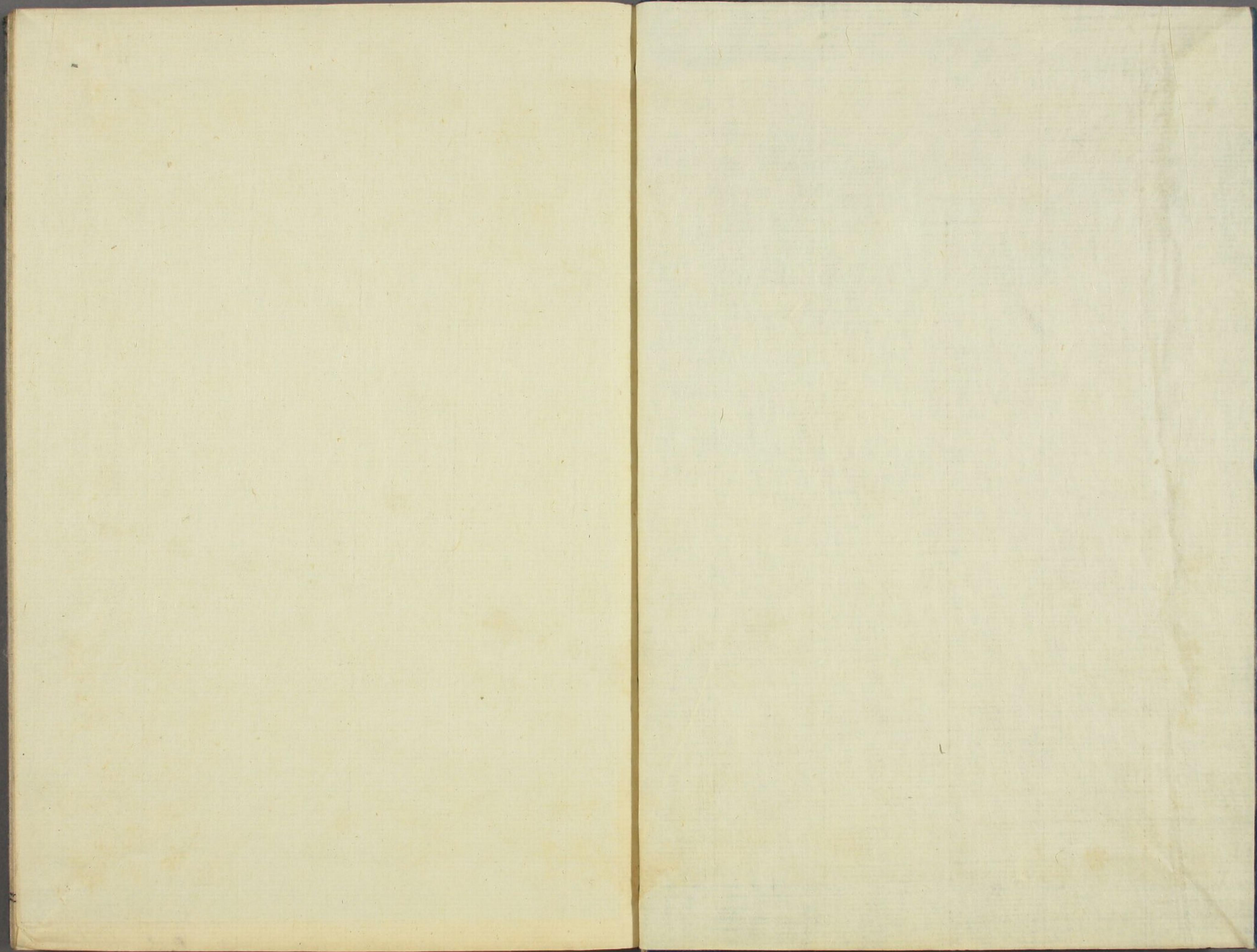


源氏物語序釋

毛宗

八

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



第八花宴評釋

帖

舊注

花

詞を以て名とすり但てお詞より直前の様は宴をすむとありて宴の二事の

とくの者けあるのによハ花のふれあひをすむとありバ是ふつて來の名と云ふふやとねらえ付まどち來花の名とハ様とを教かすをいわくも一作るうへ是ミハ花中は

幸くかれハ私の家は實ああきバ於南殿の様は宴をもて名目とせよと云得びまつたり

箋美名南殿櫻宴幸也則花宴也

新注

櫻花の宴をもて花の宴と云ふつたくまあこの説あまことどりかづてもいふとあれ

た古今集春歌よ様の事よ或ハ詞或ハ詠ともも様とあくまでも様と載

しり又諸物記の事よハ詞よももかわらんとみくらんとあるふもとと見てばどくふも

半千とさるを五百年をうつこみくらんといふくとざじよもあまよハ花とばくとばく様のすこ

なごとふ説のとあり此説は後の人のあくわいとていへ古くはうれむ

玉の名此度の様は宴のすきを頃慶きを高きをとめの坐くがどもハ坐かむらるの宴

とぞくす。湯氏君二十景の春かうり

訛

此度の名ハ南殿の様は宴小うれくうれきうちうんこするを様と云ふとりよはけて諸

抄よとくしきれくらむとあるハ新新より毎へらきこゝりがとし但新新のきハとくじゆくよ

のとよりてば南殿の比けまるとハなりともあいひがまと此南殿のはハまくふうちまうせで

様をとくのもいひくとわが一々生バ花の宴といそんふあでべとくあん史みか記源

小も皆花宴と云ふをや且このをめ名ハ既すもくうじくとく紅葉賀よ對て花江

もすと並べ奉られくうれきうれきとぞく却く穩うなるかすもあべー方今集の花

娘江の事やもがまくふ活と
らまきあらきよせどもあらち方の落り
まくはをひそめよるる事ハ
あんをほりはれハ化キ用をす
る事一章のまづりかねふりやと
のまへる御かなる故ハまづり
まづとあるを。
太白右おとより
あまくお近いぬまづり巴とく
やだちてむくとく
太白帝の御ふ
おみくらをも
おもとものまへるもくのやうかハ
あまくとくに微後段の女みく
ちほ民夷の古婦妹あれば臣民を
ゑの化人ひやうかひひもかは
もすれどこれとゆがくの坐敷訓
のやうがあるからむじこりするむ
くまくはあらわすとあるもく
長めはすめだうとあるもく
補遺又并へるとぐく
太白ひとよくりつく
ろひてたちまふ社もとを小草
かみくまくまくとく位あるを
をばー

あつわれたり。まづれと押さよとの
ハナヤカニ
あくたますも。いきまく
アリテヒジギ
深氏の死すも。一日肉すて酒あひめんのつとぞ。
太白帝の御ふ
おみくらをも
おもとものまへるもくのやうかハ
あまくとくに微後段の女みく
ちほ民夷の古婦妹あれば臣民を
ゑの化人ひやうかひひもかは
もすれどこれとゆがくの坐敷訓
のやうがあるからむじこりするむ
くまくはあらわすとあるもく
長めはすめだうとあるもく
補遺又并へるとぐく
太白ひとよくりつく
ろひてたちまふ社もとを小草
かみくまくまくとく位あるを
をばー

あつわれたり。まづれと押さよとの
ハナヤカニ
あくたますも。いきまく
アリテヒジギ
深氏の死すも。一日肉すて酒あひめんのつとぞ。
太白帝の御ふ
おみくらをも
おもとものまへるもくのやうかハ
あまくとくに微後段の女みく
ちほ民夷の古婦妹あれば臣民を
ゑの化人ひやうかひひもかは
もすれどこれとゆがくの坐敷訓
のやうがあるからむじこりするむ
くまくはあらわすとあるもく
長めはすめだうとあるもく
補遺又并へるとぐく
太白ひとよくりつく
ろひてたちまふ社もとを小草
かみくまくまくとく位あるを
をばー

あつわれたり。まづれと押さよとの
ハナヤカニ
あくたますも。いきまく
アリテヒジギ
深氏の死すも。一日肉すて酒あひめんのつとぞ。
太白帝の御ふ
おみくらをも
おもとものまへるもくのやうかハ
あまくとくに微後段の女みく
ちほ民夷の古婦妹あれば臣民を
ゑの化人ひやうかひひもかは
もすれどこれとゆがくの坐敷訓
のやうがあるからむじこりするむ
くまくはあらわすとあるもく
長めはすめだうとあるもく
補遺又并へるとぐく
太白ひとよくりつく
ろひてたちまふ社もとを小草
かみくまくまくとく位あるを
をばー

さうのかれきれぬ直衣
花かのよけのとて伊豆も
文ハラクレルソウハミキモ
儀くわくか儀物ニキシタの
こと本音をもとを思ひく
ありそとハ下がねうのをあ
あと座の椅を用ひて様のうれ
きハ面もくわきのまふ蘿芳の
うとをつけるもの

太白是く若ふ様とりたがりて白う
ら坐がりくとて寝ぬしゆかと
ありハ推亮若束抄上吉野と
の様に下がりゆくもとをもとを
今度の様に重衣のよそとゆも
うれあるとくがまかのくとを
の椅ハ地主と役のくとをもとを
事あらうとく地主と役のくとを
車石とよとをもとをもとをもとを
うとをもとをもとをもとをもとを
太白あらうとく地主と役のくとを
西宮記云上葛者直衣下着下襪

○十六

